

獄 中 記

<福山辰夫>

松本州弘

若い有志諸君に伝えたい。

まず、自分自身を見つめてほしい。見つめるといっても、自分の顔や姿を鏡に写して見てほしいのではない。自分の現在の「生き方、心のありかた」を見つめてほしいのだ。

次に、自分の周りの人々…家族…友人…地域社会の人々……。

さらに視野を広げて、君達の祖国日本の現状を冷静に見つめてほしいのだ。

今の日本人は何か「大切な忘れもの」をしているのではないか。それがものの忘れものなら事は簡単だ。遺失物届けを出して、しかるべき所へ引き取りにゆけば済むし、見つからなかったりそれがたいへん高価なものだったとしても、さっぱりとあきらめてしまうか……或いは金を積みさえすれば再び手に入れることができる。

けれども、その忘れものが「ものではなく…こころの忘れもの」ということになると、そういうわけにはいかない。もう君たちは気付いたと思うが、私たち日本人の忘れものは「こころの忘れもの…精神の忘れもの…」なのだ。具体的な言葉に置き換えれば、こころとは「**日本民族の歴史・伝統文化を守ろうとする精神**」であり「**日本人として、しっかり踏まえて行かなければならない正しい考え方**」すなわち「**正統な思想**」と言うべきものなのだ。

3千年の永きに亘る歴史の中で、私たちの祖先が営々と築きあげてきた文化遺産は、私たちが何にも増して大切にしなければならないものであり、世代から世代へと正しく継承してゆかなければならないものなのだ。ところが、その何にも増して大切にしなければならない日本の伝統文化と日本民族の精神を守り続けて行こうとする心構えを、私たちは経済的な繁栄に酔い痴れて忘れてしまっているのではないだろうか。

酔いは必ずいつかは醒めるものだが、一刻も早く一人でも多くの人に酔いから醒めてもらうのを促すのが、君達若い有志諸君が果たすべき役割なのだ。

平成の幕が下り令和を迎えた今…日本人は覚醒しなければならない。

「**こころの忘れもの**」は、遺失物届けを何通書いたところで戻っては来ない。君たち有志のひとりひとりが、それぞれに自分をしっかりと見つめ直すところから出発しなければならない。口で言うのは簡単だが、現実の社会体制の中に組み込まれて生きている君たち若者にとって現実的には、いろいろな面での枷があり、それを自分の力で自らの精神力で解いて行くのは、とても難しいことかもしれない。

だが、その道こそが、若い君たちが歩むべき一筋の道なのだ。若い君達が共に手をたずさえて、新しい旅立ちへの第一歩を力強く踏み出してほしい。

さて、福山辰夫の句歌集「**積もらざる雪**」が世に出て、早や7年の時が経つ。

彼の短歌・俳句等…句集の全ては、獄窓より視る春嵐・酷暑・秋霜・酷寒……巡る厳しき歳月を独房に座し、瞑して思い巡らす日々の胸裡を揺する情想を詠んだものである。

識者は秀逸な句歌集であると称讃して下さる。福山辰夫の長期に渡る獄中にて綴った日記が、私の手元にある。福山辰夫が娑婆に戻った時に「**句集を私に預けよ。日記があれば読みたい**」と云って、私が福山辰夫より預かり句集を識者に持ち回り、識者の賛同を戴き「**積もらざる雪**」が世に出たが、獄中日記を手元に置いたまま福山辰夫に返していなかったことに気付く。人間限りある命だが、生きている内は働かねばならぬと私は実行している。

が…人間80を半ばに至ると、昨日より今日…今日より明日と…日に日に己の気力の衰えを自覚する。遅々として筆は進まず、物事を忘却する。失礼極まりないことだが、知り人に出会っても相手様の姓名が思い浮かばない。

こうした己にいら立ち、心恠しい夜など福山辰夫の日記を繙く。

そう…福山辰夫の獄中日記は、生き抜いて成し遂げなければならぬ意志と、その意志を支える知性が煌(きら)めいている。私の胸にも青春の血潮が蘇る。福山辰夫が娑婆という現実と向かい合った時点、青春を獄で潰した年月は「**己が己と向き合い、己の真意を質し、己の生きる確固たる目的を定める思索の時間**」であったことを自身、改めて確認したと思う。

福山辰夫は長い刑路の旅が終わり、現在民族運動の道を歩んでいる。彼の思想が止まることなく、やがてはアジアに思想的歩みを進めてほしいのだ。今日の日本は、全ての規範を欧米から吸収したことで、日本人は欧米に卑屈に迎合する日本人に変形してしまった。

格差社会の拡大、日本百年の大計の取組を放棄した呆けた政治家と呼ぶに値せぬ輩達が、この日本を衰退させる。大方の人が歪んだ現在の日本の姿を視つめても、何もしない…何も考えない…この日本が今のままで好いのかと、一步前に進むことを左右の顔色を伺い躊躇う。

日本人がいつから団結心を欠いた国民性を身に付けてしまったのか。義を重んじ情けを知り、不正を糾す。あの逞しい日本人は何処へ行ってしまったのか。

日本民族は正に、智・仁・勇の精神を失い立ち竦（すく）む民族に凋落したのかと悲憤する。斯様なことは、かつてアジアの一角に誇りある民族の存在を確立した日本人にとって自負されるものではなく、表層的な繁栄に酔う日本人を諸外国の人達が「冷笑の眼（まなこ）」を以て軽視する原因となっている。

福山辰夫が日本とアジアで果たさなければならない使命とは、単に経済的な関係を持つことではなく「同質的思想に基づくアジア固有の主義・思想」を形成することである。

アジアの人々と手を携え経済、そして防衛を更にアジア民族の恒常的な繁栄を共に論じ共に歩むことで、日本はアジアの責任（常に変わらないの意）ある一員の地位を占めることができる。語り出せば話は尽きない…ストップ…。

今日から福山辰夫の刑務所で過ごした日記を、此の欄に掲載する。此の欄は若い人達の欄だ。表向き恰好つけても、精神のくすぶった野郎達には関係のない欄だ。

閉ざされた世界で福山辰夫がいかにか己の思いを紡いだか、福山辰夫の日記を私一人のものにしたくない。福山辰夫の日記を若き有志に閲覧して戴き、粗暴と云われた男が己をして「己を鞭打ち、己を訓導した軌道」を見てほしいのだ。

私は福山辰夫の獄中日記をこの欄で公開することを福山辰夫に伝えたとき、彼は驚き逡巡したが、私の再度の要請に膝を揃え承知した旨を私に伝えた。私は福山辰夫に「獄中日記」を返還した。己の日記を己が披露することは面映ゆいだろうが、心ある若き有志に一人のどうでもいいゴロツキが「己一人で力を振り絞り立ち上がり、前を向いて歩く姿」を見て戴きたいのだ。

彼の獄中での日記は、「前刑 11 年、後刑 10 年」に及ぶ膨大な数量である。掲載には限りがある。日記の全てとは云わずとも、福山辰夫が厳しい戒めの中に自分の「心の田を耕し、思想の早苗」を稲に育て上げた記録である。